

ESSAY  
しつづら  
倉元信行  
10  
ちょうじん

高校の同級生にSと言う友人がいた。名を長人というのだが誰も本名の“ひさと”とは呼ばず“ちょうじん”と棒読みにしていた。見るからにハンカラで、また実際にも風貌そのものの親分肌で人気があった。私とは生徒会の仕事を一緒にしていたが何かしらウマが合った。

よく福岡市の郊外にある彼の家に泊めてもらっては、サッポロジャイアントの瓶を空けて並べた覚えがある。小さい頃に高熱のためやや知恵遅れになった妹がいて、こいつの面倒は俺が見るんだと言っていた。

私が九大に入学した年、彼の方はいくつかの大学受験に失敗し、浪人生活を送っていた。

二人で台湾旅行をしようと言いついたのは彼の方である。もちろん二人とも金があるわけではなかったから、アルバイトに精を出した。

私は家庭教師もいくつかやっていたが、夏休みになると二人で肉体労働をやった。下水道工事の土方である。

暑い日差しの下で重いコンクリート管を担ぐ仕事は、力の無い私にとってはきついものだったが、大汗の後、帰り道の酒屋の店先で呑む一杯のビールはうまかった。

そろそろ計画を実行するのが近づいてきた秋の事である。お昼過ぎに、ちょうじんから電話がかかった。

高校の同級生だった女と長崎に来ているのだが、金が無くなったので助けてくれと言う。すぐに列車に乗って駆けつけた宿は、金も無いのに九十九島近くの結構立派な構えの旅館であった。

二人の話によると、教職者である彼女の父親に結婚を反対されて家を飛び出して来たと言うのである。19才の浪人のくせに結婚しようとは、向こう見ずというか、さすが親分というべきか。しかし私は彼の味方であった。

アルバイトで貯めていた旅行費用の入った預金通帳と印鑑を渡し、私は一人帰りの夜汽車に乗った。

これからの行動は大胆であった。

三年生の時に彼の担任であったK先生を訪ねて行き、彼女の親を説得してくれるように頼んだのである。今から思うとよくそんな無茶な事をしたものだときれるが、何とK先生はこれを引き受けてくれた。

この先生はシャンシャンというあだ名の名物先生で、母の事故が起きた時の私の担任でもあり、全くの偶然だが妹の中学校で母の事故の時募金箱を設けてくれたあのK先生の旦那様でもある。

痩身に黒ぶちの丸いめがねをかけ、アメリカ嫌いのこの英語の先生のひょうひょうとした語り口はとても懐かしい。

先生と私は連れだって彼女の家に談判に出かけた。

隣の部屋で、先生と父親との話を私はじっと待った。

よかった。彼がきちんと大学を出て一人前になったら結婚してもよいと言う許しをもらい、その前提の下に、父親は二人の交際を認めてくれたのである。

翌年彼は市内にある私立大学に合格して、学生生活に入った。

これで全てを解決したと、若い私は満足していた。

それから2年ほど経ったころ。理学部の化学教室で有機合成の実験をしていた私のところに、のっそりとしたいつもの足取りでちょうじんが現われた。

彼女から別れ話が出たというのである。猪のくび顔がこわ張っている。

「今からあいつの家に行って話ばして、駄目やったら」

新聞紙に巻いた包丁を彼は取り出した。

私は包みを預かり、一緒に行こうと学校を抜け出した。

学校から彼女の家までの長い道のりを私たちは

歩いた。じめじめと蒸し暑い午後の日差しの中を。

いったん別れる事を決心した女が、話を聞いて意を変えるはずが無い。

私たちは無言でこの長い道をまた戻る事になる。ちょうじんが失踪したのはそれから間もなくの事である。なんでもいんな友達からカメラや楽器などを借りたまま行方が分からなくなったと後で聞いた。

風の便りに、ちょうじんは広島で塾をやっているらしいとの噂もあったが誰も会った者はいなかった。

思いがけなく私の前にふらりとちょうじんが現われたのは消えて7年ほど経ってからの事である。

私は既に山口県徳山市にある化学会社に就職して、独身寮に入っていた。

この寮に突然彼から、今徳山に着いたと電話があったのである。

女を連れていた。

あの時の人と似て、とても大人しい感じの女性だった。

駅近くの行きつけのおでん屋で話を聞くと、熊本で彼女の父親が建設業をやっている、自分はそので働くつもりだと言う。

結婚式の司会なら何度もやっているから、熊本に行きたくて司会をするよと約束した。過去の事には触れなかった。

それからひと月もしないうちに突然彼女から寮に電話がかかってきた。

何と、ちょうじんが居なくなると涙声で言うのだ。

私に心当たりを尋ねられても答えようが無かった。

それから25年、ちょうじんは私の前から姿を消したままである。

一回目の失踪後、私はちょうじんの家を訪ねた事がある。

通っていた大学も、家族も捨てて居なくなった長男の事を、母親は疲れた顔で語っていた。

その後聞いた話だが、公務員であった彼の父は競艇で大きな借金をし、役所を辞めて家を手放してしまったそうである。

ちょうじんはこの事を知っているのだろうか。面倒を見ると言っていた妹の事はどうしたのだ。

今もどこかの街でちょうじんは別の女と暮らしているだろう。彼も52才になったはずである。

